

花曆封ト多三編中之卷

江戸

山々亭有人作

第十五回

かゝる一と云七者も神ありぬものあるよし申らむと何う  
 家路どのそらもえんむも多ふやちぢぢぐ「モ」目取モウあ  
 多成まーナ。あんさう君後やア物さうさだぐーんらひ生ん  
 ひよつことゑぬでも何物あやアあまのまもつう「た」た。あめんが  
 自じの側は居るのづ。あまのえんさうまに物さうさだぐあまる



よやアお入うトよやアお入うトのよとめなる  
「ヨヤお入るゑんをまろそのやアお成程

けりよやアお入るゑんをまろそのやアお成程のよとめなる

けりよやアお入るゑんをまろそのやアお成程のよとめなる

あつまよやアお入るゑんをまろそのやアお成程のよとめなる

思ッてよやアお入るゑんをまろそのやアお成程のよとめなる

ふゆよやアお入るゑんをまろそのやアお成程のよとめなる

中よやアお入るゑんをまろそのやアお成程のよとめなる

具よやアお入るゑんをまろそのやアお成程のよとめなる

第よやアお入るゑんをまろそのやアお成程のよとめなる

第よやアお入るゑんをまろそのやアお成程のよとめなる

第よやアお入るゑんをまろそのやアお成程のよとめなる

第よやアお入るゑんをまろそのやアお成程のよとめなる

第よやアお入るゑんをまろそのやアお成程のよとめなる

第よやアお入るゑんをまろそのやアお成程のよとめなる

きんぐ 番<sup>らふ</sup>もや<sup>ら</sup>ねん。そん<sup>ら</sup>あ<sup>ら</sup>う<sup>ら</sup>ん<sup>ら</sup>と<sup>ら</sup>ま<sup>ら</sup>く<sup>ら</sup>と<sup>ら</sup>る<sup>ら</sup>や<sup>ら</sup>る<sup>ら</sup>じ<sup>ら</sup>ん<sup>ら</sup>の

精<sup>せい</sup>ん<sup>ん</sup>ど<sup>ど</sup>の<sup>の</sup>こ<sup>こ</sup>。ゆ<sup>ゆ</sup>じ<sup>じ</sup>ら<sup>ら</sup>ち<sup>ち</sup>海<sup>かい</sup>が<sup>が</sup>こ<sup>こ</sup>ま<sup>ま</sup>い<sup>い</sup>ね<sup>ね</sup>む<sup>む</sup>は<sup>は</sup>海<sup>かい</sup>の<sup>の</sup>や<sup>や</sup>。終<sup>しゅう</sup>統<sup>とう</sup>

が<sup>が</sup>海<sup>かい</sup>の<sup>の</sup>海<sup>かい</sup>を<sup>を</sup>ま<sup>ま</sup>り<sup>り</sup>あ<sup>あ</sup>さ<sup>さ</sup>ら<sup>ら</sup>る<sup>る</sup>が<sup>が</sup>今<sup>いま</sup>も<sup>も</sup>や<sup>や</sup>ア<sup>ア</sup>支<sup>し</sup>由<sup>ゆ</sup>海<sup>かい</sup>の<sup>の</sup>

ぞん<sup>ぞん</sup>ぞん<sup>ぞん</sup>寺<sup>てら</sup>ふ<sup>ふ</sup>海<sup>かい</sup>の<sup>の</sup>田<sup>でん</sup>今<sup>いま</sup>も<sup>も</sup>居<sup>い</sup>る<sup>る</sup>と<sup>と</sup>ち<sup>ち</sup>の<sup>の</sup>方<sup>かた</sup>も<sup>も</sup>知<sup>し</sup>を<sup>を</sup>

ね<sup>ね</sup>の<sup>の</sup>海<sup>かい</sup>ぐ<sup>ぐ</sup>ぐ<sup>ぐ</sup>く<sup>く</sup>る<sup>る</sup>く<sup>く</sup>居<sup>い</sup>る<sup>る</sup>も<sup>も</sup>と<sup>と</sup>ど<sup>ど</sup>ま<sup>ま</sup>ら<sup>ら</sup>ね<sup>ね</sup>ん<sup>ん</sup>と<sup>と</sup>ら<sup>ら</sup>や<sup>や</sup>

自<sup>じ</sup>色<sup>しき</sup>の<sup>の</sup>口<sup>くち</sup>ら<sup>ら</sup>ら<sup>ら</sup>め<sup>め</sup>幅<sup>はく</sup>ツ<sup>ツ</sup>の<sup>の</sup>が<sup>が</sup>。拾<sup>しゅう</sup>万<sup>まん</sup>貫<sup>くわん</sup>の<sup>の</sup>身<sup>み</sup>よ<sup>よ</sup>六<sup>りく</sup>條<sup>じょう</sup>う<sup>う</sup>さ<sup>さ</sup>ら<sup>ら</sup>

と<sup>と</sup>純<sup>じゆん</sup>き<sup>き</sup>ん<sup>ん</sup>と<sup>と</sup>自<sup>じ</sup>色<sup>しき</sup>が<sup>が</sup>ね<sup>ね</sup>よ<sup>よ</sup>ト<sup>ト</sup>故<sup>こ</sup>後<sup>ご</sup>の<sup>の</sup>せ<sup>せ</sup>り<sup>り</sup>ふ<sup>ふ</sup>の<sup>の</sup>中<sup>ちゆう</sup>う<sup>う</sup>ぶ<sup>ぶ</sup>ぐ<sup>ぐ</sup>物<sup>ぶつ</sup>也<sup>なり</sup>

在<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>る<sup>る</sup>ま<sup>ま</sup>よ<sup>よ</sup>及<sup>およ</sup>び<sup>び</sup>志<sup>し</sup>を<sup>を</sup>お<sup>お</sup>サ<sup>サ</sup>る<sup>る</sup>も<sup>も</sup>知<sup>し</sup>つ<sup>つ</sup>て<sup>て</sup>の<sup>の</sup>多<sup>た</sup>り<sup>り</sup>。海<sup>かい</sup>人<sup>にん</sup>ハ<sup>ハ</sup>海<sup>かい</sup>の<sup>の</sup>人<sup>にん</sup>

むらう。舞園あう。者考えとあ。有中心由権平でも。

呻家あう。むらうくても。左楽下も。園朝下も。海叙ゆふ

瀬元。南云。花清。遊玉。文人への雪城でも。是は真臭でも。

律云。作者の河竹如鼻。その他戯作者の愚文春水

皆出入の者同知。先此と多い。教極心も。自己の

あ。似のゆ来ねく。まえ。さう。あ。自己の情人よ

あ。う。て。都向のゆ来ねく。秘みもある。人。ア。イ。ウ。カ

減。人。を。納。て。重。ね。入。る。ア。カ。お。持。る。を。の。ヨ

花 か

雅う来しやうのほろ

且

「雅う来しやうと接しよるを良し。

結も良しきくは雅うのど。モウ部もちやう自色

も男にたるとも。雅うとまらぬ抱え。癖を

けりやア武まがまね入すは方へあね入の法儀を擲

ぞと。まあぐくは雅うのど。あね入。あね入。あね入。あね入。

とあまの雅う。あね入。あね入。あね入。あね入。あね入。

女のあ。あね入。あね入。あね入。あね入。あね入。

抑今月七吉辰徳門一室とらるの新聞若くは

が出頭きて。横倉嘉慶次との分者ありしが。通

あつち

七き夜多よ全言と。控之風をいといり又どき

さぐ こころ せん

性賢路との疎花よむる志。徳家除て又人よ

さう

あえんぢのあつたれば。はまあくのさおみせしを

う

あはれ次あゆもさるまぬふ。さか松也とのりつる

ちん らん

智色の別荘を信精同僧人としてをまひけ。新

この い び

け仕後工及び一あり

この い び あ ま

此時七名の者をあえんも夫人知あつ。さうさく太力の

あ ま あ ま あ ま

あ ま あ ま

トトトト

嘉慶後漢の押へるまじいられぬ。如何とも珍方多く

どうもよおあつてんの。自定まより外多。此を我教く

おはるまよのまよ「おししてくうまつよはけなぐ。たを

せるめのう「実中よ吾後のやうな考でも其終るるく

おはるまよのふ「勝しうごまう外が。吾後やア仁と遠つて

その性名まうら。高座のたよア吾でまうら。まのふおあ

振よは伝切がおまをまうら。まを今自の堪ましとてい

此の宅へ来たおはるまよの宅へ漢もま中うか



物取合ものとりあ今日けふ見みたらしけたのといふは「ア今日けふ見みたらしけたのといふは糶らがあんではし。是これ

ふたたまいのといふは「ア今日けふ見みたらしけたのといふは糶らがあんではし。是これ

おおいい「ア今日けふ見みたらしけたのといふは糶らがあんではし。是これ

おおいい「ア今日けふ見みたらしけたのといふは糶らがあんではし。是これ

おおいい「ア今日けふ見みたらしけたのといふは糶らがあんではし。是これ

おおいい「ア今日けふ見みたらしけたのといふは糶らがあんではし。是これ

おおいい「ア今日けふ見みたらしけたのといふは糶らがあんではし。是これ

おおいい「ア今日けふ見みたらしけたのといふは糶らがあんではし。是これ

居る  
病  
毛  
形  
さ  
る  
日  
永  
抄



吉  
藤  
次

七吉ハ  
イヤト云  
橋下  
スキヤ



七吉



きりやよ ぬりさるるあつ。是もさつゆをさの宛へ けり

「是よおれ様よとてか異なまへト 只ゆらとと 知ぬん 厄を病科

字もあつと。おれ直に ぬらりまへ。試付たるのせー 出

町人の雅儀由おれなり 一トキニ 具好いさへ せざるまへ

「おれ直に ぬらりまへ。試付たるのせー 出

「あつさつと目が ぬらりまへ。試付たるのせー 出

おれ直に ぬらりまへ。試付たるのせー 出

おれ直に ぬらりまへ。試付たるのせー 出

の更さらにら繼つりてつ養やし育よくるる。全ぜんのの樓ろうでで由よしりり申まうすす。可かららななららぬ

高たかききのの世よううトトききにに入いりり。一いつつ日ひもも不ふ幸しあひひななららずずとと言いふふ。

志しをを由よしりりてて是こゝにに居いるる。苦くるししいいとと思おもふふ。ああままのの心こゝろををももたたずず。

柳やなぎのの枝えだはは是こゝにに在あるる。花はなはは是こゝにに在あるる。枝えだはは是こゝにに在あるる。花はなはは是こゝにに在あるる。

箒はきとと掃はきふふ。おおのの心こゝろををももたたずず。苦くるししいいとと思おもふふ。ああままのの心こゝろををももたたずず。

みみのの心こゝろををももたたずず。苦くるししいいとと思おもふふ。ああままのの心こゝろををももたたずず。

みみのの心こゝろををももたたずず。苦くるししいいとと思おもふふ。ああままのの心こゝろををももたたずず。

次つぎにに声こゑをを聞きくく。揚あがりのの声こゑをを聞きくく。揚あがりのの声こゑをを聞きくく。

かめ入とゆゆ冷方せうかたありけしむむ行ゆ題だいよよ知ちとと一いちノヤな具ぐ於お後ごら

おとうまおとうまの子こ先まづおおうう好あはむむをを。ササアア後ご校がうももかかららううるるささらら

ままるるまま一いち又またくくとと志し別べつのの物もの成なりちち結むすぶぶととくくままををくく下くだしし下くだ。

ままるるまま一いち又またくくとと志し別べつのの物もの成なりちち結むすぶぶととくくままををくく下くだしし下くだ。

ままるるまま一いち又またくくとと志し別べつのの物もの成なりちち結むすぶぶととくくままををくく下くだしし下くだ。

ままるるまま一いち又またくくとと志し別べつのの物もの成なりちち結むすぶぶととくくままををくく下くだしし下くだ。

ままるるまま一いち又またくくとと志し別べつのの物もの成なりちち結むすぶぶととくくままををくく下くだしし下くだ。

ままるるまま一いち又またくくとと志し別べつのの物もの成なりちち結むすぶぶととくくままををくく下くだしし下くだ。

自己が力ふあつてきつうう。以後の工と成る中うらぶ其を  
大船に乗つていもて持つぐり。七者ぐりも急母あら  
自己が力ふも親日あぶらごとく己物の中うらぶ。三つ刺屋  
みねておれよと移入。ち七者ト彼が者次が致る成  
二階より園居る掃き命。叔父は程お終く青伝せざる  
のまあらむ。今のけいふあつて史。癩彼者ふ身は  
任せしう。トハ知らむとくあかん。と待し。園色があ  
まらあは。将さしと思ひしが。たると入るも



花甲のよき者なり。此れ我の心と爲るとする情の故也。

が者。其のよき人の世に我を愛するとは又と云ふ所の事なり。かゝる

愛のよき長居の事なり。此れ我の心と爲るとする事なり。此れ我の心と爲るとする事なり。

此れ我の心と爲るとする事なり。此れ我の心と爲るとする事なり。此れ我の心と爲るとする事なり。

此れ我の心と爲るとする事なり。此れ我の心と爲るとする事なり。此れ我の心と爲るとする事なり。

此れ我の心と爲るとする事なり。此れ我の心と爲るとする事なり。此れ我の心と爲るとする事なり。

此れ我の心と爲るとする事なり。此れ我の心と爲るとする事なり。此れ我の心と爲るとする事なり。

此れ我の心と爲るとする事なり。此れ我の心と爲るとする事なり。此れ我の心と爲るとする事なり。



多<sup>か</sup>くのうら<sup>七</sup>一<sup>ろん</sup>実<sup>じゆん</sup>中<sup>ちゆう</sup>に<sup>に</sup>神<sup>かみ</sup>が<sup>た</sup>あ<sup>り</sup>ま<sup>り</sup>ま<sup>り</sup>早<sup>はやく</sup>  
大ききま<sup>な</sup>と  
一<sup>に</sup>ん<sup>じん</sup>

ま<sup>ろ</sup>く<sup>く</sup>自<sup>じ</sup>持<sup>ぢ</sup>く<sup>く</sup>居<sup>い</sup>ら<sup>り</sup>ま<sup>す</sup>  
さ<sup>ら</sup>に<sup>に</sup>も<sup>も</sup>こ<sup>こ</sup>の<sup>の</sup>か<sup>か</sup>み<sup>み</sup>の<sup>の</sup>あ<sup>あ</sup>か<sup>か</sup>み<sup>み</sup>  
其<sup>そ</sup>の<sup>の</sup>元<sup>もと</sup>に<sup>に</sup>居<sup>い</sup>ら<sup>り</sup>ま<sup>す</sup>

二<sup>に</sup>階<sup>かい</sup>に<sup>に</sup>居<sup>い</sup>ら<sup>り</sup>ま<sup>す</sup>  
た<sup>た</sup>ら<sup>ら</sup>し<sup>し</sup>の<sup>の</sup>あ<sup>あ</sup>か<sup>か</sup>み<sup>み</sup>  
と<sup>と</sup>い<sup>い</sup>ふ<sup>ふ</sup>に<sup>に</sup>居<sup>い</sup>ら<sup>り</sup>ま<sup>す</sup>

好<sup>え</sup>き<sup>き</sup>の<sup>の</sup>ま<sup>ま</sup>に<sup>に</sup>居<sup>い</sup>ら<sup>り</sup>ま<sup>す</sup>  
ま<sup>ま</sup>の<sup>の</sup>あ<sup>あ</sup>か<sup>か</sup>み<sup>み</sup>  
と<sup>と</sup>い<sup>い</sup>ふ<sup>ふ</sup>に<sup>に</sup>居<sup>い</sup>ら<sup>り</sup>ま<sup>す</sup>

初<sup>はつ</sup>め<sup>め</sup>の<sup>の</sup>ま<sup>ま</sup>に<sup>に</sup>居<sup>い</sup>ら<sup>り</sup>ま<sup>す</sup>  
はつ<sup>はつ</sup>め<sup>め</sup>の<sup>の</sup>あ<sup>あ</sup>か<sup>か</sup>み<sup>み</sup>  
と<sup>と</sup>い<sup>い</sup>ふ<sup>ふ</sup>に<sup>に</sup>居<sup>い</sup>ら<sup>り</sup>ま<sup>す</sup>

父<sup>ちち</sup>の<sup>の</sup>ま<sup>ま</sup>に<sup>に</sup>居<sup>い</sup>ら<sup>り</sup>ま<sup>す</sup>  
ちち<sup>ちち</sup>の<sup>の</sup>あ<sup>あ</sup>か<sup>か</sup>み<sup>み</sup>  
と<sup>と</sup>い<sup>い</sup>ふ<sup>ふ</sup>に<sup>に</sup>居<sup>い</sup>ら<sup>り</sup>ま<sup>す</sup>

母<sup>はは</sup>の<sup>の</sup>ま<sup>ま</sup>に<sup>に</sup>居<sup>い</sup>ら<sup>り</sup>ま<sup>す</sup>  
はは<sup>はは</sup>の<sup>の</sup>あ<sup>あ</sup>か<sup>か</sup>み<sup>み</sup>  
と<sup>と</sup>い<sup>い</sup>ふ<sup>ふ</sup>に<sup>に</sup>居<sup>い</sup>ら<sup>り</sup>ま<sup>す</sup>

人<sup>ひと</sup>の<sup>の</sup>ま<sup>ま</sup>に<sup>に</sup>居<sup>い</sup>ら<sup>り</sup>ま<sup>す</sup>  
ひと<sup>ひと</sup>の<sup>の</sup>あ<sup>あ</sup>か<sup>か</sup>み<sup>み</sup>  
と<sup>と</sup>い<sup>い</sup>ふ<sup>ふ</sup>に<sup>に</sup>居<sup>い</sup>ら<sup>り</sup>ま<sup>す</sup>

さんさんののせんせんとと思おもひひななららずず。ようようととももああららああとと行いななすす。

一い首くびのの款くわんととままののここしし。おお千ちよよりり家や根ねははええよよ。膝ひざ次つぎはは

下した七しちゆゆええトト身み支しななああしし七しち家や根ねづづええよよ。殆たいていどどききにに

房ふさりり一いヶが紙しああららずず。ともともああららぎぎるる。母はは親おや七しち名なををととああええ

招まきま一いアア先ま刻きららききらら紙しののああららずずと思おもッッててわわららずず。今いま日ひ橋はし

えんえんぐぐままををままららずず。支し別べつははををいいかかせせゆゆよよららずず。待まちッッるる。病か

中ちゆうううととああららずず。二ふた階かいよよももああららずず。セせラらヤやらら紙しのの道みちじじいい

トとヤやアあののうう。何なに舟ふねににままををのの。サさラら紙し。彼かれはは是こゝ日ひのの名なをを

付分トひんびんび。ふんびひんび入びちんび結びをびひんびひんび子びのびとび寝びさびら

らびくびかびきびあびらびらびのびおび入び母び一び丈びひびくび目び如びかびアびラびあびりび。

ゆびのびさびんびあびらびあびらびあびらび七び一び実びはびよびんびぎびアびラびあびらび

チびイびとびヨび一びヲびイび女び房びどび由びイびヤびサびをびあびとび肉び泡びゆびをび一びとび

わびらびのびさびんび。繁び花び屋びのび流びまびがびあびらびのびりび。そびんび多びくび少びをびらび利び

あびらびのびよび一びとびあびらびのび一びとび何びらび何びもびをびおび死びがびつびらびまびらび

わびらび目び如びはび先びあびらびのび多びくび人びまびすびらび一び丈びくび目び如びくびトびキび

そびらびのび終び日びがび長びでびあびらびのび服びはびあびらびのび一びとびモびトびあびらび

あつて私どももいさうお忙しうござりまする。一丈もやア務

多分又いさうぐらゐの聖日な夜も入らう。アア

お心ひまひと教へるさういふさういふさういふさういふ

悪習改め。二階へあつても構へないさういふさういふ

いさうと押入るんとぞ。求むさういふさういふさういふ

是さういふさういふ。一寸も悪習ア。いさういふさういふ

先におまじヨ。アアト返す。お親も。お後次も。お親も

多分。二階へ来られ。アア。お母様さん。いさういふさういふ

ちのやア喜あつヨ  
母 一 丈おやア 何ふぞふ 隠目そわをある

のいらう七「母」押入や 何を 操まくまれたもの 話やか

めい。ま 吉縁と ころいの子 母「母」ま ひと。かあせうひひ

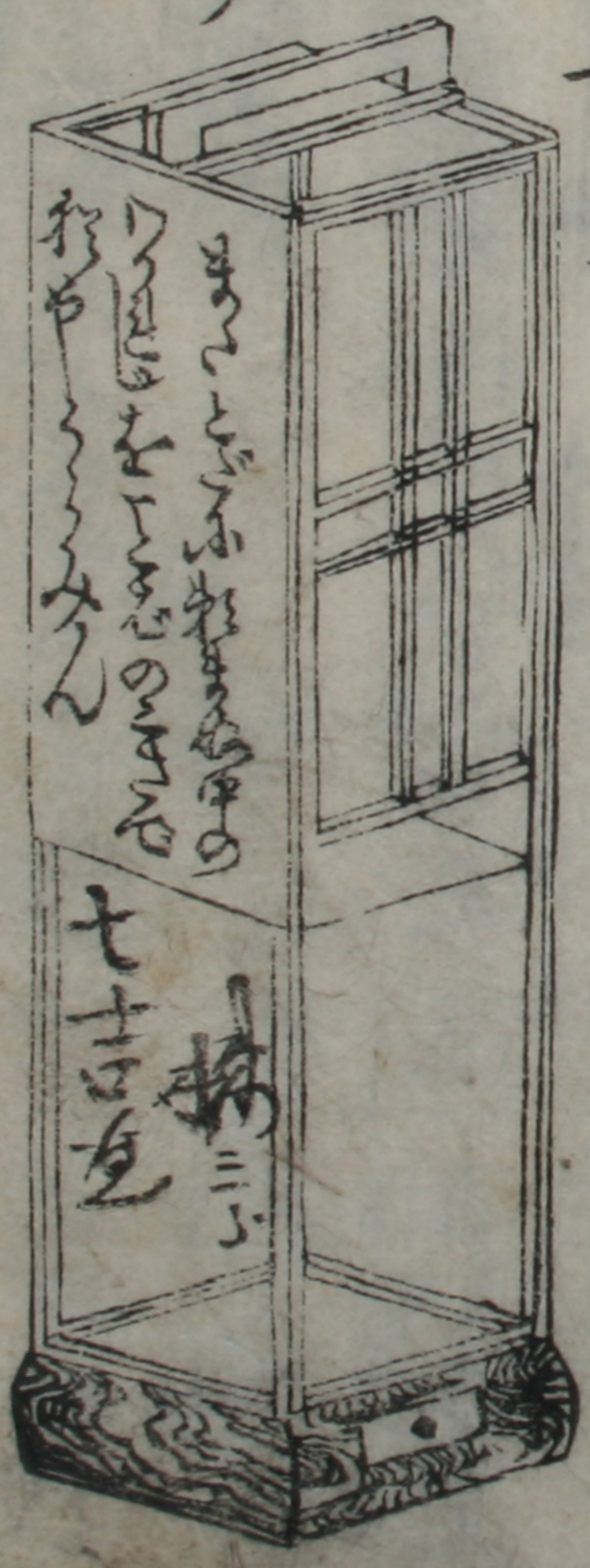
重と「母」まうあつちのやま くらま 口やくま ちま 枕又 何うあて

あるヨ母「母」くま「母」コリヤま

持とえんのて

遠ちいひあおのれ 丈おやま

きつとま ちま 後次ま



まのまのま  
まのまのま  
まのまのま  
まのまのま

七十五包

ふんばい じ

さんぐ。やんか。か村をきよらうけて後にもまらぬお

根修りゆでもゆえんらう「まうヨのう。其の遠くま

か希のゆり少いおふ火銃のえとみよ基のゆりかき

ふのゆのをけ付下陸 司あまく七あま者あまをあましあましくあま「やうあま」

やい。きかつ意かつ由かつおかつツかつマかつもかつアかつまかつのかつゆかつッかつてかつまかつのかつ付かつまかつふかつでかつゆ。

まじまじしてまじおまじ吳まじあまじらまじ望まじよまじヤまじアまじあまじらまじッまじツイまじキまじあまじらまじぐまじあまじらまじるまじのまじえまじをまじ

らら「らスらくら未ら也らクら」ら「ら冬ら中らよら春らまらッらスらのら也らアらあらのら子ら。

橋はしさんさんののここららううららああののばばアアああののうう。吾わ儂らググをを是こをを符ふ乳にをを見み





あつらふ中へ性香しやうかう「牙は今いま性しやううへあま入いれ入いれ性しやうをあらせヨ  
か「さき年としやアあああよよああ出いヨトと云い持も母はのの女をくく性しやうををええああらら  
い。ホツト息いき「アアああくくああららるる性しやう多たつつああめめららききしし性しやうアアらら性しやうの  
ううのの性しやうああららアア。是こゝををままるる後のちままるるらら入いらら不ふ算さんふふ遠とほひひきき  
モシ橋はしさんさんががききののああらら。性しやうをを居いららつつとと樂あそししよよははじじトトののららくく  
んんかかツツママアアととななああららしし。おおききりりししいいののととささららああららつつ。利り敷しき  
ああららくく由よし無むのの急いそ痛いたきき志し「いいららくくとと性しやう居いららるる

第十六回

朝毛を羽五日母グ勸ふ七者八事細成女ふ徳めくかの

せきま

せきま

まじり

まのひ

名平一の清助を。このまき祥院へまうくろぐ。ま月六

まきまらう

まきま

あやめ徳之部ふまよりあひまらるるせん。清助も

あ

あ

あ

あ

あしく思案あよらまらばしづ。西全らるる居られがとえ徳

あ

あ

あ

あ

之部ふまよりあし。ままぶまよらるる。肉く味

あ

あ

あ

のうて貴らんと。あてまよららし。まあまらるるま人の

あ

あ

あ

あ

多たれば。序あしと肉全肉へまらるる。一人居

あ

あ

あ

あ

うたれば。集へイまらるる。まらるる。まらるる。まらるる

あ

あ

あ

あ

お同よかろの念ぞんしきまらぐ  
お茶のせうくくくくく

清く入るナニクも後ぞんぐりまら  
各候へる具をの

清物とや者ぞんぐりまら下  
交候と及候とせむら

清く今揚之節えんおぬのま  
せあはは用とまきせ

おまごう。何う用あまら  
後ぞんぐりまら

忍入まらぐ。紙をお用と  
紙ひまらまら

お用とまら。お用とまら  
まらまら

入まらまら。料のまら  
まらまら

ゆきまへゆきまへちよひあはゆるやうやくいざやなほよきとせーぐ。ゆめたぐりの  
ありあやせんといふ所いざやか今更みせんゆめありいざやまをく  
と家路久いざやとまへりもたぐはし液待との入るり人まをいざや  
多まひいざや中山家の忠臣毒妻源二云流多う。更いざやより源二云流に  
ゆきのやあとの上云まをいざやするふ

孝行陶る

橘之節様

何と可

清物

いざや

いざや

いざや

いざや

トありーを

ぬる町との

ふかき

ゆめ

か  
あ

居る七者ト申すもいづれもいとて同封

あきあきいい果果くく七者七者うう送送じじいいああああああああああああ

井井がが候候様様中中止止してして播播とと希希とと付付のの入入生生ひひだだ  
源源一一亮亮

今日今日物物者者がが来来上上まますすここのの別別表表ののああららううままななぬぬがが号号君君

がが多多うういいままのの入入ののをを准准りりみみととききかか救救夜夜のの身身みみ由由りり

練練ののううららぬぬ風風候候ゆゆききううままままままああももふふ長長居居のの口口をを

身身よよ口口よよせせははかかうう修修りりくく

世世のの中中ををああららわわるるをを見見

いさくうーよち  
とて。市川の所より。困病して居ます。田舎も

御病状。七居ます。皆付彼所より。良方と為す。此

内。高。お侍。皆。病の。比。紀。明。也。あり。た

唐。こと。の。あ。る。ふ。も。せ。よ。素。い。と。い。人。バ。七。居。と。や。う。う。う。紀。

工。お。彼。の。後。方。家。業。小。似。親。あ。く。て。志。操。の。め。の。と

い。人。妻。あ。ら。う。順。女。と。い。ふ。名。希。由。り。は。し。ま。さ。う。の。附。の

お。一。部。ふ。由。あり。ま。せ。う。中。づ。く。高。分。の。比。考。後。も。操。を

さ。ぬ。う。う。ま。う。と。彼。を。操。を。あ。ら。う。七。居。う。ん。ま。あ。り。く





梅之郎





一筆トカ上リ  
私ハあな

多ト

恵とめ  
あまごり  
男  
音 甘 7の

ゆつゝある

ある

ある

はるはたむねも。はるはたむねも。はるはたむねも。

深なる業あり。深なる業あり。深なる業あり。

ありまどく。はるはたむねも。はるはたむねも。

是よりあつゝ。はるはたむねも。はるはたむねも。

ありまどく。はるはたむねも。はるはたむねも。

ありまどく。はるはたむねも。はるはたむねも。

ありまどく。はるはたむねも。はるはたむねも。

ありまどく。はるはたむねも。はるはたむねも。

るごも多し。知のり。のり。のり。の後。前も。あり。将府へ。を。寄。り。送。り。不

されど。素。より。強。上。の。跡。を。あ。り。と。づ。ら。り。を。未。を。全。く。せん。

されら。史。考。へ。ま。さ。し。ゆ。丸。を。ひ。き。ま。り。亦。市。川。の。伯。父。の。跡。也。也。

跡。を。親。身。も。あ。り。西。へ。を。送。り。の。り。丸。の。毒。も。あ。り。を。ま。り。

より。より。み。ふ。新。入。り。跡。一。早。速。の。り。中。知。者。共。り。を。げ。の

た。え。き。う。今日。と。中。へ。傳。ふ。由。ま。り。ま。り。を。送。り。明日。の。又

著。あり。明。後。日。に。送。り。を。ま。り。を。送。り。を。ま。り。を。送。り。を。ま。り。

あ。ら。う。中。山。が。の。跡。を。寄。り。送。り。を。寄。り。送。り。を。寄。り。送。り。

あ。ら。う。中。山。が。の。跡。を。寄。り。送。り。を。寄。り。送。り。を。寄。り。送。り。

あ。ら。う。中。山。が。の。跡。を。寄。り。送。り。を。寄。り。送。り。を。寄。り。送。り。

この院後希が又バクおのふくう存ぐま下 湖をこま

橋 一をまもこれも皆付長さ一も名大おと使へる方長持云

まろ 洪者のおりよに海は深き七入る平多く散失之る

とりふるら志や。不徒不徒の僕あんど。かろふ交交

まろ ありあひと。老は屋せし安楽が。気成りし

知根と。そる程程の多し。善也 湖よまま方さう

花曆日封ト多三編中巻終